公開講演会記録

# 北海道、歴史の「つながり」を歩く
## ――戦争・拓殖・満洲

北海道大学名誉教授　渡辺浩平

札幌に転居して間もない頃、近所の魚屋さんから、「二度泣く」という言葉を聞いた。札幌赴任は二度泣くというのだ。越して来たときに一度、離れるときにもう一度、泣くのである。

冬の寒さは尋常ではない。でも、北京で暮らしたことがあったので、それには耐えられた。だが、吹雪には閉口した。首元にも、口にも、コートのポケットにも雪が飛び込んでくる。真正面から吹き付けられると、歩くのさえ往生する。

雪かきも一苦労だ。札幌生活には車が必需品、駐車場の除雪は朝の仕事だ。集合住宅はまだまし、同僚の住む一戸建ては、公道に出るまでに長い私道があるので、早朝からはじめ、昼までかかったことがあった、と言っていた。豪雪のときは、かいてもかいても、終わらないのである。

近年は温暖化で雪解けが早くなったが、四半世紀前の転居当初は、四月の下旬にも雪が降った。大型連休でもストーブをつけたくなる日がある。ゴールデンウィークをひと月遅らせてほしい、日本という国は祝日も中央集権なのか。地方都市で暮らしていると、何かにつけて「東京目線」を感ずることが多い。

「二度」の意味もじきにわかった。連休を終えて新緑が芽吹き、夏が近づくと、道民は郊外へと繰り出す。車でちょっと足を伸ばせば、大きな公園がひろがり、バーベキュー広場もある。子育てにはもってこいの環境なのである。

夏になると、郊外の直売店には、色とりどりの野菜がならぶ。夏の樹木は、高画質テレビに映るような鮮やかな緑をなし、秋の紅葉も、鮮烈な赤に染まる。後者は寒暖の差のなせる業なのだろう。

春から夏への季節の移ろいと、夏から冬にかけての足早の気候の変化、札幌の四季は、緩急を変えて、劇的に展開していくのだ。雪にあまりあるものが、北海道の四季には詰まっている。

「二度泣く」という言葉を教えてくれた魚屋さんの魚は実に美味しかった。北の魚は、ホッケを代表とするように、大きく、油がのっているのだ。

## 1914（大正3）年の炭鉱事故と東京駅

だが、一つだけ不満があった。「街歩きはいまひとつ」という感想を持ったのである。これまで住んだ街、京都も、上海も、北京も、そして名古屋も、時代は異なるも、「歴史」があらわに顔を出しているように感じられた。通りを歩きながら、その街の歴史についての本を読むことを楽しみの一つにしていた。

だが札幌は、過去が路頭にあらわになっていない、そのように思えたのである。その言い方は、正確さを欠き、北海道庁・赤レンガや、かつての札幌農学校演舞場・時計台と、近代史蹟は残されているのだが、それが、北京や上海のように、重層的に街に露出しているわけではない。何か、新しいものによって覆い隠されている、そんな感想を抱いていたのである。

この地の歴史への関心が一挙に高まったのは、炭鉱だった。空知地方の東の山々にかつて、炭鉱があった。空知の中心地は岩見沢だ。石炭の輸送中継点として栄えた街だ。空知にある炭鉱の代表が夕張と言えるであろう。使われなくなった立坑や塞がれた坑口を目にしたとき、近代を動かして来た荒ぶる力に粛然とするものがあった。

夕張市石炭博物館の館長だった青木隆夫さんが、長年にわたり夕張で「鹿之谷ゼミナール」という勉強会を開いていた。時折、その勉強会に参加した。座学もあれば、史蹟を訪ねる散策もあった。

２０１４（平成26）年暮れの勉強会のテーマは、若鍋鉱のガス爆発事故だった。若鍋鉱は、夕張炭鉱の一つで、百年前の１９１４（大正３）年11月28日に４２３名という死者を出す事故を起こしていた。その前後、夕張では事故が多発したという。その翌月、福岡の方城炭鉱でもガス爆発がおき、６８７名が命を落としている。それが、日本国内最大の炭鉱事故となった。言うまでもなく、安全性を無視した過剰採掘が理由である。

記憶はおぼろげだが、勉強会は12月に入ってから開かれたように思う。それから2週間ほどしてから、東京へ行った。母が一人で暮らしており、年末は戻らねばならない。

東京駅がライトアップされていると聞いていたので、帰宅前に寄ってみることにした。浜松町から東京駅行き、新丸ビルの上階へ。暮れなずむ赤レンガに、イルミネーションが灯っていた。ガラス越しに見入る人々から歓声があがる。東京駅は開業百年を迎え、リニューアルされ、電飾が施されていたのである。東日本大震災から3年、人々は「華やぎ」に飢えていた。ビルの下にも、イルミネーションを見入る

人が列をなしていた。

その瞬間、百年前の夕張の炭鉱事故と東京駅は「つながっている」と思った。先に記した通り若鍋炭鉱の事故が１９１４（大正３）年11月28日、「東京中央停車場開業式」は12月18日のことだ。その年の夏に、第一次世界大戦がはじまっていた。

日露戦争から約10年、「一等国」を自負するようになった帝国日本の「影」と「光」が、同時期に起きている。日露戦争で獲得した関東州の撫順炭鉱でも、その３年後の１９１７年に、９１７人が死亡するというとんでもない事故が発生していた。日本の資本主義が、身の丈にあわない膨張を遂げていた時代だ。

１９１４（大正３）年暮れの夕張の炭鉱事故と東京駅の開業が、「どのようにつながっているのか」、それを明らかにする史料を持ち合わせているわけではない。直接的な相関を示す文献を探しあてることは、難しいだろう。だが、無関係とは思えなかった。

この場合の「つながり」はヨコ、つまり同時代という地平のものだが、タテ、つまり時系列はどうなっているのか。このときに感じた「つながっている」という感覚が、その後の北海道における「街歩き」の原動力となった。

## 「牡蠣」から「アイスクリーム」へ

炭鉱の次に興味を抱いたのは「軍」だった。かつて旭川に司令部を置いていた「第七師団」が北海道を語る上で欠かせない存在であることを知るようになったのだ。「北門の鎖鑰（さやく）」という言葉が、「蝦夷地」を「北海道」たらしめた理由だからである。

鎖鑰とは、錠とカギ。そこから転じて、外敵の侵入を防ぐ要地となる。北方の外敵とはロシアである。その外敵の盾となったのが屯田兵であり、その屯田兵をもとに、第七師団が編制された。その第七師団の成立から崩壊までの歴史をたどったのが、２０２１（令和３）年に出版した『第七師団と戦争の時代―帝国日本の北の記憶』である。その続編が『戦争と拓殖の時代―北海道歴史観光』（２０２５年）。前著の中心が「軍」ならば、後者のそれは「拓殖」だった。

『戦争と拓殖の時代』では、幕末から太平洋戦争までの北海道民を主人公にすえて、「戦争」と「拓殖」によって、「国民」へと変貌していく北方の民を描いた。それは、総力戦へと動員される民衆の姿でもある。

その第五章の舞台が、道東厚岸（アッケシ）だ。２０２５年11月21日（金）に開催された国際善隣協会の「21世紀アジア塾」では、その厚岸の４００年の歴史を話した。これから記す内容は、その折の講演を整理し文字化したものである。

唐突に「厚岸と言われても、北海道で暮らした経験がなければ、その地名を知る人は少ないのではないか。まず、厚岸の位置を確認しておくことからはじめよう。釧路から東に50キロほど、北海道の最東端の街・根室には約１００キロのところにある。北海道のかなり東に位置する港町である。

北海道民なら、厚岸という地名を聞

くと、すぐに「牡蠣」を思い出すのではないか。厚岸では牡蠣の養殖が盛んだ。

ではこれから、先に述べた「つながり」の視点から、厚岸の近世から近代の歴史を述べてみたい。

厚岸には「厚岸湖」という内海がある。「湖」といっても海水で、そこでは古来、牡蠣が豊富にとれた。先住民はその牡蠣をとって暮らしていた。その牡蠣とアイヌ先住民が、物語の起点となる。

今、私はその地を漢字で「厚岸」と表記するが、「アッケシ」とも呼ばれる通り、アイヌ語由来である。それを近代以降、厚岸と表記したのだ。ここでは便宜的に「厚岸」と書く。

では終点はどこか。乳製品である。現在、厚岸の内陸部では酪農が盛んだ。というよりも、釧路から根室に至る根釧地区は、日本有数の酪農地帯である。この地域の牛乳がハーゲンダッツのアイスクリームに使われているのは有名な話だ。

では、この「牡蠣」と「アイスクリーム」はどうつながっているのか。言葉を変えて言えば、「牡蠣」と「アイスクリーム」をつなぐものは何か。それは、「異国船の来航」であり、「江戸幕府の北方防衛」であり、「屯田兵村の開村」であり、そして、陸軍の「軍馬補充部」となる。そのような近世から近代にかけての外圧による国内政治の変容が、なぜ、「牡蠣」から「アイスクリーム」への媒介項となりえるのか。

古来、厚岸湖では、先住民が栄養価の高い牡蠣を食べて暮らしていた。そのことは、すでに述べた。竪穴式住居やチャシ（砦）も発見されている。時は下って17世紀初め、徳川家康は松前藩に蝦夷地の支配を認め、松前藩は海岸部を「場所」として家臣の知行とした。厚岸にも「場所」ができた。「場所」とは、和人とアイヌが交易を行う場である。

## 国泰寺で育った和人とアイヌの子・太田紋助

その後、この取引は、商人に委託され、松前藩の武士は運上金を得るようになる。地域によっても差があるが、この交易が、アイヌ民族を従属的な立場に追いやることとなる。

そこに新たな闖入者があらわれる。異国船である。厚岸にはじめて外国船が来航したのは17世紀半ばのことだっ

写真①　厚岸の国泰寺

た。オランダ船が「黄金島」を探しにやって来たのである。だが、江戸幕府にとって一番の脅威はロシアだった。

16世紀後半にウラル山脈を越えたロシア人は、シベリア制圧後に、17世紀前半に太平洋岸に達する。その後、カムチャツカ半島を経て、千島列島を南下する。鎖国政策をとる幕府にとって、ロシアの接近は大きな脅威にうつった。ロシア人の東方進出の主たる目的は、海獣の毛皮にあったが、しかしその時代の和人は、赤蝦夷の来襲という「夢魔」（渡辺京二）に脅えることとなる。

最上徳内、近藤重蔵の蝦夷地探索は、そのような時代背景のなかで行われた。江戸幕府は、東蝦夷地を幕府領とし、その地の鎮護のために建てたのが、国泰寺だった。国泰寺は現在も厚岸に残る。幕府は国防上の理由から、松前藩に任せてはおけないと考えたのだ。

さらに時代は下って江戸時代末期、厚岸の「場所」は和人の商人が請け負い、そして、そこに、他の地からやってきた和人が働いていた。その一人に、中西紋太郎がいた。南部大畑の出身で、アイヌの女性との間に生まれた子が太田紋助だった。江戸時代末期、１８４６（弘化）年のことである。

## 屯田兵村・太田村

この太田紋助が、先にあげた「屯田兵村の開村」に大きな役割を果たすのだ。

太田紋助は幼いころから、国泰寺に預けられ、読み書きと農耕を学ぶ。時は御一新となり、この地の開拓は佐賀藩が請け負うこととなる。太田紋助は、同地の移民とともに農業に携わり、馬の飼育を行う。近世、厚岸で作物を育てていたのは、国泰寺だけだった。

その後、太田紋助は開拓使から馬の払下げを受け、「人馬継立（じんばつぎたて）」という駅逓間の輸送の業務を中心とした商売をはじめ、厚岸の有力者となる。アイヌ同胞の授産のために、私財を投じて、農地や漁場も開いた。

厚岸の北の地には「太田」という地がある。太田紋助が尽力してできた「太田屯田兵村」の跡地である。彼は土地を購入し、開拓民の入植を先導した。屯田兵村に太田の名が付けられたのは、そのような功績による。

明治政府が蝦夷地を北海道と名をあらため、北方防衛の拠点としたのは、先に述べた「夢魔」、別の言い方をすると「恐露病」が大きな要因だった。日本は絶えず、ロシアの南進に不安を抱いていた。そのロシア南進という恐怖が、近代の日本の「北進」を生む一つの理由となった。北方の防衛線は、遠くに保っておかなければならない。それが「満洲国」にまでつながっていく。日本の近代を拘束した宿痾とも言えるだろう。

また、自著の宣伝で恐縮だが、２０２４（令和６）年に上梓した『聖地旅順と帝国の半世紀』は、港湾都市「旅順」を中心にすえて、近代の日本の蛇行した歴史を「戦後」の誕生まで、描いたものである。ここでいうカッコ付きの戦後とは、ヤルタポツダム体制に

よってその原型がつくられ、朝鮮戦争、サンフランシスコ平和条約を経て、極東における日本の基地化までを意味する。その歴史の起点を「旅順」としたのだ。

写真②　太田紋助の墓

日清戦争で獲得した遼東半島を三国干渉によって返還を強いられ、その後、ロシアはかの地を租借、それを、日露戦争で奪い返したという記憶は、「戦後」の生成にまで影響を及ぼした、という仮説である。

話を戻す。

幕末に結ばれた日露和親条約で千島列島は、択捉島（エトロフ）と得撫島（ウルップ）の間が日露の境界線となった。

司馬遼太郎の言葉を借用すると（これは近世についてのものだが）、ロシアは、敷石（千島列島）づたいに、やってくるかもしれないからである。それがすでに述べた「夢魔」を生み、「恐露病」を育んだのである。

後年のことだが、その屯田兵から生まれた第七師団は「北鎮部隊」と呼ばれた。北方防衛を任務とする部隊という意味である。

だが、樺太（サハリン）は日露の混住地だった。樺太がロシア領に、千島列島の占守島（シュムシュ）までが日本領となったのは１８７５（明治８）年の樺太・千島交換条約による。その年に最初の屯田兵が、札幌の琴似（ことに）に入植する。屯田兵の使命は、北方防衛と北海道の開拓にあった。

写真③　太田屯田兵村の屯田兵屋

そして、厚岸の北の地に太田屯田兵が開村したのは１８９０（明治23）年

のことだった。それ以前には根室のそばに和田屯田兵村がつくられていた。

屯田兵村は、１８７５（明治８）年の琴似、その翌年の札幌山鼻を嚆矢として、当初、札幌近郊に開かれていった。それは、開拓本府たる札幌の開発と不可分の関係にあった。その後、旭川を経て、網走へと抜ける中央道路沿いにつくられていくが、太平洋岸は、室蘭の近郊の輪西（わにし）、根室の和田、厚岸の太田にしかない。特に、和田と太田は純防衛的な目的のもとに開かれた屯田兵村だった。その理由は明らかだ。

## 集治監が廃止され、軍馬補充部に

話の筋がいささか込み入ってきたが、もう少し「アイスクリーム」の前史にお付き合いいただきたい。北海道の開拓を語る上で、もう一つの欠かせない要素が「集治監」、つまり監獄である。そこに収容されていた囚人によって初期の開拓がなされたのだ。そこに至る史実を以下、簡単に記しておく。

屯田兵の役割は、二つあった。一つは北方防衛、もう一つが農業開拓だ。この地に農業を根付かせねばならない。だが、先に述べた根室の和田と厚岸の太田は、農業よりも、防衛に軸足があった。「敷石づたい」にやってくるかもしれないロシアへの防備が主たる目的だった。しかし、この道東の二つの屯田兵村は農業には不向きだった。日照時間の短さと冷涼な気候がその理由である。

太田村の誕生に力を尽くした太田紋助は開村後２年でこの世を去る。太田村に入植した屯田兵は、３年の扶持米が切れると、その多くが村を離れていった。

そして、畑作のかわりに根付いたのが、牛馬の飼育だった。当初は畜産であり、その後、酪農となる。その試みがこの地域を酪農王国とするのだ。

だが、その前に媒介項の説明が必要となる。先に述べた、集治監ともう一つ軍馬である。

写真④　標茶町に残る釧路集治監（現郷土資料館）

厚岸の西北に標茶（しべちゃ）という地がある。その場所に１８８５（明治18）年に集治監ができた。明治中期の北海道開拓が、囚人による労働によってなされたという史実はご存じの方も多いだろう。根釧地区も例外ではない。初期のアトサヌプリ硫黄鉱山も、太田村へ至

る道路も屯田兵屋も、集治監の囚人労働によった。

その標茶にあった釧路集治監は１９０１（明治34）年に廃止され、網走へと移される。その７年後に標茶にできたのが、軍馬補充部だった。軍馬補充部とは、陸軍の外局で、軍馬を育成する組織である。

標茶に生まれた軍馬補充部では寒冷地用の軍馬が飼育された。それは、１９００（明治33）年に誕生した白糠の軍馬補充部に続くものだった。白糠は釧路のそばにある。

なぜ、冷涼な気候の道東に軍馬補充部ができたのか。近代史に詳しい向きは、ご明察のことと思うが、日清戦争で遼東半島を得た日本は、三国干渉でその地を奪われる。いつの日かロシアと一線を交える日が来る。それが帝国陸軍の想定だった。

日露戦争で、旅順、大連を含む関東州を租借すると、大陸の北方で戦える軍備が必要となる。それが、寒冷地用の軍馬育成の理由だ。

軍馬補充部では、２歳馬を買い付け、５歳まで育てる。それを、第七師団（司令部：旭川）や第八師団（司令部：弘前）におさめるのである。

そして、その軍馬補充部の設立が、この地の牛馬市場を活性化するのだ。ただし、根釧地区の畜産、酪農が軍馬だけによって、発展したわけではない。太田村でも、開村当初から、牛馬を買い入れていた。北海道庁は日露戦争後に「牛馬組合」の結成を指示する。太田村でも、当初は肉牛が主だったが、しだいに乳牛へと転換していく。北海道庁は、牛馬飼育の奨励を強化するのである。

濃霧が立ち込め、冷涼な気候であるというこの地域の不利が、逆に牛馬飼育という新たな産業を見出すこととなる。それが、ハーゲンダッツへとつながっていくのである。

## 「満洲国」と北海道、二つの「弥栄村」

『戦争と拓殖の時代―北海道歴史観光』の第五章で描いた話はここまでだ。だが、現在につながるアナザーストーリーがある。その話を最後にしておきたい。

１９３２（昭和７）年３月に「満洲国」が生まれた。柳条湖事件をしかけた一人に東宮鉄男（とうみやかねお）がいた。彼は満蒙開拓団の入植地選定にも大きな役割を果たした。対ソビエト社会主義共和国連邦、さらに、満蒙の「匪賊」対策のために、入植者は武装移民とし、入植地も満洲の北方が選ばれた。

その第一次の入植地は、「弥栄（いやさか）村」と名付けられた。弥栄とは、栄えること。「国の弥栄を祈って～」と、掛け声にもつかわれる。「万歳」の代わりの「弥栄」の信奉者が、筧克彦だった。筧は東京帝国大学法学部の教授で、神道を中心にすえた国体論を主張した。

「満洲国」の農業開拓を推し進めた一人に加藤完治がいた。加藤は東京帝国大学農学部を卒業し、那須皓（しろし）、橋本伝左衛門らと満州国の農業開拓を推し進めた一人だ。加藤は筧の信奉者だった。満蒙開拓団の武装移民第一村は

「弥栄村」と名付けられた。

話はソ連参戦後に飛ぶ。そのとき、弥栄村には１８００人の村民がいた。彼らが、村を出発したのは１９４５（昭和20）年８月12日のことだった。大連を経て、佐世保に到着したのはその年の12月。逃避行では４６４人が命を落とした。子どもが多かったという。

加藤完治の薫陶を受けた一人に中村孝二郎がいた。高校時代に加藤、那須に出会い、東京帝大農学部に進み、その後、植民地朝鮮で農業指導に携わった。１９３２年３月の「満洲国」建国後に、加藤らから満洲へ呼び寄せられ、入植地の選定作業を担うのだ。

第一次満蒙開拓団たる「弥栄村」選定は、東宮と中村の仕事だった。そのとき、彼は拓務省拓務技師で、移住適地調査班長だった。１９３５（昭和10）年に中村は、満洲拓殖会社経営部長となり開拓団の経営と営農指導を続ける。

中村の引き揚げは１９４６年のことだ。その後、中村孝二郎は「弥栄村」引き揚げ者の再入植地の選定に携わる。入植者の多くは農家の次男、三男で、故郷の村に戻っても、耕す土地がない。その再入植が必要だった。その一つに標茶が選ばれたのである。

なぜ、標茶なのか。帝国陸軍は解体し、１８０００㌶にのぼる軍馬補充部の土地があったからだ。北海道庁も「戦後開拓」のため、新たな開拓者を求めていた。

旧「弥栄村」出身者40数戸は中村孝二郎とともに、現在の上多和地区に入植する。中村孝二郎の回想録『原野に生きる』（開拓史刊行会、１９７３年）には、入植当初の筆舌に尽くしがたい苦労が描かれている。樹木を薪材にし、木炭を生産し、そこから馬鈴薯、甜菜を栽培、さらに馬産へ、そして乳牛へと開拓の歩を進めた。

その標茶町上多和地区の小学校、中学校、そして神社とも「弥栄」の名が冠せられた。「母村」の記憶が継承されたのである。

北海道は１９８６（昭和61）年に黒龍江省と友好提携を結ぶ。その２年後の１９８８（昭和63）年に、北海道の「弥栄村」は訪中団を結成し、「母村」たる佳木斯市孟家崗鎮（永豊村）を訪ねる。

黒龍江省から北海道庁に、国際交流

写真⑤　標茶町上多和地区の弥栄神社

員が派遣されると、交流担当者は上多和地区を訪問する。それを機に孟家崗鎮との交流が活発化する。一例を挙げると、黒龍江省と北海道の二つの小学校の間では絵や書の交換がなされた。幾度か「弥栄村」引揚者を中心とした訪中団が組織された。

実は、この話は、北海道大学大学院国際広報メディア観光学院の中国人留学生・王淞巍さんの研究による。彼は、吉林省長春の出身で、「満洲国」の歴史に興味を持ち、「『満洲国』から北海道へ―標茶町上多和地区を事例に」という論文を書いた。

王さんは標茶町の役場を訪ね、インタビューを行い、資料にあたった。私が指導教員だった。その話を聞き、2024年の夏に厚岸を訪れた折に、標茶町の上多和地区にも足を伸ばしたのである。

先住民と牡蠣からはじまる厚岸の歴史は、江戸幕府による直轄領化、和人とアイヌの子・太田紋助、集治監、屯田兵村、そして、軍馬補充部を経て、さらに、「満洲国」を介して、酪農へとつながっていく。上多和地区の産業は酪農だ。

厚岸とその周辺の根釧地区の歴史は、圧倒的な厚みをもって、迫って来た。そのような歴史の重層性は、この地域だけの話ではないだろう。

写真⑥　廃校となった弥栄小学校（撮影・王淞巍さん）

そして、そのような歴史の「つながり」に気づいたきっかけは、2014年の暮れに、夕張で聞いた400人を超える死者を出した炭鉱ガス爆発事故であり、そして、同時期に東京駅を彩っていたイルミネーションなのである。

（2025年11月21日・公開講演会）

**筆者略歴（わたなべ・こうへい）**

立命館大学、東京都立大学人文科学研究科修士課程修了後、博報堂入社。その間、北京、上海に駐在。愛知大学現代中国学部常勤講師を経て、北海道大学言語文化部助教授。その後、同大学院メディア・コミュニケーション研究院教授。現在、北海道大学名誉教授。近年の著書に、『吉田満　戦艦大和学徒兵の五十六年』（白水社、2018年）、『聖地旅順と帝国の半世紀』（同上、2024年）などがある。